

ジグソー学習

2021. 12. 21

昨日、文知摺観音や松尾芭蕉の句について書いていたら、昔の記憶が蘇ってきた。S中学校に勤務しているときのことである。その学校は、落ち着かない学校だった。当時、私は生徒指導主事だった。国語の授業を行いながらも常にスクランブル態勢だった。

授業はというと、どうしても一斉形態になりがちだった。すると、教師の説明が中心となってしまう。これではいけない、これではいけないと思いながらも、月日が経っていった。

そんなとき、たまたま読んでいた教育雑誌に「ジグソー学習」なるものが出ていた。読み終わって「これだ!」と思った。瞬間的に直感的にである。早速、国語の授業に取り入れることにした。古典がいいと思った。ちょうど「奥の細道」の学習を間近に控えていた。

学習目標は「みんなで奥の細道ガイドブックをつくろう」である。班をつくり、班員の一人一人が、ジグソーパズルのピースのごとく分担をした。福島県を中心として、白河、須賀川、二本松、福島その1 信夫の里、福島その2 医王寺、福島その3 飯坂、平泉、そして松尾芭蕉本人についてである。

調べる学習が主になるが、そのためには資料が必要である。そこで、S中学校の図書室にある本はもちろんのこと、県立図書館から奥の細道と芭蕉に関する本をたくさん借りてきた。

この方法だと、自分が調べた内容についてはスペシャリストになっている。だが、他の内容についてはわからない。ジグソー学習の利点はここからである。例えば、白河の班員は、元々の自分の班に戻り、白河について責任をもって報告をするのである。自分の班に戻って報告をするという使命、責任があるため、自ずから熱心に学習するようになる。

果たして、うまくいくのだろうかという不安があった。ところがである。生徒は生き生きと、水を得た魚のように、みんなで協力しながら学習している。生徒は、このような学習を待っていたのである。待ち望んでいたのである。きっと知的に楽しかったのである。知らなかったことがわかる。知りたいことがわかる。魅力的な学習だったのだろう。

自分の班に戻ると、自分が担当した部分については、一番知っているのである。自分しか知らないのである。意気揚々と報告するようになる。自信もついてくる。

この学習に入る前までは、芭蕉が福島県をこんなに訪れていたとは知らなかったはずである。教科書には、出発の地である江戸と平泉しか載っていない。学習後は、生徒にとって芭蕉との距離が縮まったはずである。芭蕉の句も覚えたことだろう。

学習目標は、ガイドブックをつくることとした。だが、本当のねらいは、少しでも古典が身近になること、古典に親しむことである。できれば、当時の芭蕉に思いをはせてくれれば、いうことはない。

S中学校での国語の授業というと、真っ先に蘇るのが、奥の細道のジグソー学習である。これを契機に、パネルディベートなどを取り入れていった。あのときの生徒には感謝している。私に何も言わずとも、望んでいる授業を私に教えてくれた。落ち着かない状況だと、どんどん悪循環にはまり、授業もよくない方向にいつてしまう。ピンチはチャンスである。逆転の発想の大切さを生徒が教えてくれた。